

<研究報告>

ユネスコスクール認定幼稚園におけるESD実践 —領域「環境」との関連に焦点をあてて—

安達仁美 信州大学学術研究院教育学系
篠崎正典 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：幼児教育，ESD，ユネスコスクール，領域「環境」

1. はじめに

本研究の目的は、ユネスコスクール認定幼稚園における「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable development, 以下ESD)の実践内容を整理し、子どもの具体的な遊びの姿を捉えることを通して、ESDにおける領域「環境」の位置付けについて考察することである。

2016年12月21日に公表された中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」において、ユネスコが提唱するESDが学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念であることが明記された。それを受けて2017年に告示された学習指導要領では、総則(文部科学省2018a)に「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される児童(生徒)」という一文が明記され、さらに、新たに加わった前文においても、「一人一人の児童(生徒)が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」と記載された。この新しく改訂された学習指導要領は、小学校は2020年度、中学校では2021年度から、高等学校では2022年度より学年進行での導入されることが決定している。さらに、幼稚園教育要領や学習指導要領の改訂のみならず2018年6月に閣議決定された第三期教育振興基本計画¹においても「今後5年間の教育政策の目標と施策群」の中で「ESDの実践・普及や学校間の交流を促進するとともに、ESDの深化を図る」ことが示されており、ESDの理念が日本の学校教育全体に反映されることとなっている。

また、幼稚園教育要領も改訂され、2018年度より全面実施されている。幼稚園教育要領(文部科学省2018b)の全文には「一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに(中略)持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる」と記載されており、幼稚園が小学校以降の教育の基礎であることが示されている。「基礎を培う」という位置付けは、第一章総則にも「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」と記載されており、また、学校教育法第22条²においても「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして(中略)その心身

の発達を助長することを目的とする」と示されている。ESD がこれからの日本の教育において基盤となる理念であることを考えると、それらの基礎を培う幼稚園においていかにESDの理念が反映された教育が行われ得るのかを問うことが重要であることが分かる。

ESD に合わせて同じ持続可能な社会づくりを目指すSDGs (Sustainable Development Goals) への関心が高まる中で、幼児教育とESDやSDGsとの関連について取り上げた研究が増えている。保育内容の5領域の中でも、領域「環境」との関連を示した論稿は注目されており、例えば、藤永(2020)は、ESDやSDGsと領域「環境」との関係について整理し、領域「環境」の「内容とリンクしている」ことを指摘している。また、谷口(2020)も、同様に領域「環境」にESDやSDGsの考えが明確に記載されているとした上で、保育者養成用の教科書の記載内容の不十分さを指摘し、「保育者養成に関してESDやSDGsのより一層の理解と内容の改善が必要である」と述べている。さらに、後藤(2019)も領域「環境」とESD・SDGsに共通の視点があることを指摘し、教材の在り方について言及している。このように、ESDの理念と領域「環境」の内容の親和性の高さが数多く指摘されている。しかしその一方で、理念上の関連性を指摘するに留まっている点において課題が残されている。

2019年12月に行われた第74回国連総会においてESDの更なる取り組みを促すための国際枠組みとして「Education for Sustainable Development in the framework of the 2030 Agenda for Sustainable Development (ESD for 2030)」が採択されている。その中では、「国際社会に対し、幼児教育から高等教育、遠隔教育、職業技術教育まで、すべての教育段階において包摂的かつ公正な質の高い教育を提供するよう求める」³ことが言及されており、幼児教育段階からの教育の質の向上が問われている。また、2019年10月に日本ユネスコ国内委員会がまとめた建議「ユネスコ活動の活性化について」⁴においても、「ESDを通じてどういう力が身につくのか見えにくい」等の国内のESDの課題について触れながら、ESDの考え方を分かりやすく整理して共有することの必要性が明言されている。このように、ESDの更なる展開に向けて、幼児教育段階からESDを通して育まれる資質・能力の在り様について分かりやすく明示することが求められているのである。よって、ESDと領域「環境」との理念上の共通性を指摘するだけでなく、ESDを通して育まれる資質・能力を把握するためにもESD実践における子どもの具体的な姿から領域「環境」の要素を捉えることが必要である。

以上から、本研究は、ESD実践にける幼児の遊びの様相を質的に捉えることを通して、ESDと親和性が高いとされている領域「環境」の位置付けについて考察をしていく。なお、幼稚園におけるESD実践については、ESDの推進拠点と位置付けられているユネスコスクール認定幼稚園の取り組みを事例として取り上げる。さらに、幼児の遊びの様相から領域「環境」の要素を捉える際には、子どもが「探究」している姿に着目する。領域「環境」とESDとの関連性の強さは先行研究において指摘されているが、表1のように幼稚園教育要領に示された各領域の説明を並べると、必ずしも領域「環境」のみがESDと関連があるわ

ユネスコスクール認定幼稚園におけるESD実践

表1 幼稚園教育要領に示された5領域のねらい

領域	幼稚園教育要領に示された内容
健康	健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。
人間関係	他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。
環境	周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。
言葉	経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。
表現	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

けではなく、その他の4領域においても、例えば「自立心を育て、人と関わる力（人間関係）」「自ら健康で安全な生活をつくり出す力（健康）」などESDで育むべき資質能力と関連する要素が含まれていることが分かる。その中で領域「環境」のみが持つ要素は、「好奇心や探究心をもって」関わるという対象への向き合い方に関する視点である。内容の取扱いにも「(1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気づき、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること」と記載されており、そこからも領域「環境」が探究的な学び方の基礎を培う領域であることが分かる。よって、「探究」を切り口としながら子どもの遊びの様相を捉え、ESDにおける領域「環境」の位置付けについて考察していく。

2. 研究方法

本研究では、まずユネスコスクール認定幼稚園でのESD実践の全体の傾向を把握するために、ユネスコスクールに加盟している学校が、毎年、日本ユネスコ国内委員会に提出することが求められている年次報告書の分析を行う。次に、ユネスコスクール認定幼稚園の中から実践事例を取り上げ、具体的な子どもの姿を観察・記録し、遊びの過程を分析する。その上で、ESDにおける領域「環境」の位置付けについて「探究」を切り口に考察する。

3. ユネスコスクール認定幼稚園のESD実践

3.1 国内におけるユネスコスクールの広がり

ESDの推進拠点として位置付けられているユネスコスクールは、近年、加盟校数が増大しネットワークが広がりつつあるが、そのスタートは1953年に国連のUNESCO本部が創設した「ユネスコ協同学校ネットワーク事業」(UNESCO Associated Schools Project Network, 以下ユネスコ協同学校)が土台となっている。ユネスコ協同学校は、「人間の尊厳を基底とする現代のヒューマニズムに基づく平和な社会を“教育”の力で築こうと提唱するUNESCOの理念を實踐する学校間ネットワーク」⁵⁾と位置付けられており、2007年の第34回ユネスコ総会で採択された「ESDの更なる推進」に関する決議において、ESD推進のためにユネスコ協同学校のネットワークを十分に活用すべきとの指摘がなされたことを

表2 ユネスコスクール加盟状況（2019年11月）

学校種	加盟校数
幼稚園	21
小学校	554
中学校	279
高等学校	156
中高一貫校	60
高等専門学校	1
大学	5
特別支援学校	12
その他	32
合計	1120

きっかけに、ESD 拠点校としての役割が新たに加わることとなった。そして、2008年に日本ユネスコ国内委員会が公示した提言⁶によって、学校現場への普及を目的に「より親しみやすい呼称とする」ために、ユネスコ協同学校が「ユネスコスクール」と改称されることになったのである。現在、世界182の国・地域で11,000校以上のユネスコスクールがあり、日本国内の加盟校数は1,120校（2019年11月現在）で世界最多となっている。ユネスコ協同学校からユネスコスクールと改称された2008年当時は24校だったこと考えると、この10年間に国内で一気にESDが普及したことが分かる。なお、現在のユネスコスクールの学校種別の加盟校数は、表2の通りである。ユネスコスクールの幼稚園は現在21園ある。

3.2 年次報告書からみるESD実践の分類と傾向

次にユネスコスクール認定幼稚園のESD実践の傾向を把握するために、ユネスコスクールの年次報告書の内容を整理した⁷。本稿では、特に2019年度に提出された年次報告書の内容から、活動分野に関するチェック項目に着目した。15項目の中から活動内容に該当する分野を複数選択できるようになっておりESDに関わる多様な領域における活動の傾向を把握することが可能である。21園のユネスコスクール認定園の活動分野を整理した結果が表3である。21園中19園で実践されていたのは環境分野に関する内容であった。

表3 ユネスコスクール認定園におけるESDの活動分野（2019年度）

幼稚園名	加盟年	生物多様性	海洋	減災・防災	気候変動	エネルギー	環境	文化多様性	世界遺産・地域の文化財等	平和	国際理解	人権	ジェンダー平等	福祉	持続可能な生産と消費	その他関連分野
1 湖畔幼稚園	2011	○					○				○			○	○	
2 清泉幼稚園	2010				○		○		○	○				○		
3 羅臼町立羅臼幼稚園	2012	○	○		○		○		○							
4 羅臼町立春松幼稚園	2012		○				○									
5 気仙沼市立馬籠幼稚園	2011						○									
6 気仙沼市立唐桑幼稚園	2013		○				○									○
7 富谷市立富谷幼稚園	2018						○									○
8 富谷市立東向陽台幼稚園	2018						○									○
9 清和大学附属八重原幼稚園	2013			○			○	○			○					
10 東京ゆりかご幼稚園	2018	○					○									○
11 新潟大学教育学部附属幼稚園	2014	○					○				○					
12 信州大学教育学部附属幼稚園	2018						○									
13 愛知教育大学附属幼稚園	2012	○					○									
14 名古屋市立桶狭間幼稚園	2014	○							○	○			○			
15 名古屋市立神の倉幼稚園	2015	○			○		○								○	
16 奈良市立富雄北幼稚園	2010						○				○					
17 奈良市立六条幼稚園	2011						○		○			○			○	
18 奈良市立二名幼稚園	2012						○		○			○				
19 奈良教育大学附属幼稚園	2018						○		○		○	○			○	
20 あやの台幼稚園	2018	○					○	○			○	○				
21 広島大学附属幼稚園	2017	○					○					○				○

ユネスコスクール認定幼稚園におけるESD実践

次に、環境分野に該当する具体的な実践内容について把握するために年次報告書の活動内容に関する記述から環境分野に該当する内容について整理した（表 4）。環境分野として行われている実践には、資源回収や資源再利用、清掃活動、地域散策や自然体験活動、植物や野菜の栽培や調理に関する活動、生き物飼育や施設見学など多様な内容が含まれている。また、表 3 において環境分野の該当が無かった名古屋市立桶狭間幼稚園や奈良市二名幼稚園に関しても、活動内容の詳細を確認すると生物多様性や人権分野として自然体験活動や地域の人と共に園内に花を植える活動が行われており、同様の活動を環境分野としている園もあることを考えると、ほぼ全ての園で環境分野に関連する ESD 実践が行われていることがわかる。なお、加藤（2016）も、日本の幼児教育における ESD の取り組みについて「環境」「経済」「社会／文化」「平等」の 4 つに分類した結果、「環境」の視点が突出していたことを明らかにしており、「環境問題は馴染みの深いものとなっていることや、幼児教育・保育への取り入れやすいこと」が幼児教育の ESD 実践において環境分野が多い理由であると推測している。以上の整理を基に、ESD 実践の中でも多くの園で取り入れやすい環境分野の活動に焦点をあて、具体的な子どもの姿から領域「環境」との関連について迫っていく。

表 4 年次報告書に記載された環境分野の活動内容（2019 年度）

ユネスコスクール認定園	環境分野に該当する内容
湖畔幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・キャップ・リングブル・古切手・書き損じはがき・資源物の回収と仕分け ・廃品を使った製作活動 ・園全体でゴミの削減への理解
清泉幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・エコキャップ、書き損じはがき、古切手、古眼鏡の回収
羅臼町立羅臼幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の自然環境について学べる施設見学
羅臼町立春松幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・浜のクリーンアップ活動 ・自然体験活動
気仙沼市立馬籠幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・栽培活動、調理体験 ・地域散策
気仙沼市立唐桑幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・浜のクリーンアップ活動
富谷市立富谷幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・異年齢交流、地域交流 ・リサイクルセンターの見学と空き缶回収
富谷市立東向陽台幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・栽培活動、調理体験
清和大学附属八重原幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・節水や節電 ・ユニクロの『届けよう、服のチカラプロジェクト』 ・みどりの絵コンクールへの参加
東京ゆりかご幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・里山教育（稲作、畑作、里山再生）
新潟大学教育学部附属幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの環境（自然物）とかかわる遊び ・廃材を使った製作
信州大学教育学部附属幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・資源回収 ・再生資源を使った遊び ・資源、環境に係わる学習
愛知教育大学附属幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・ビオトープでの自然体験活動
名古屋市立神の倉幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の自然環境を取り入れた活動 ・生き物の飼育
奈良市立富雄北幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・「菜の花プロジェクト」（菜の花の栽培・収穫・活用を通した循環型社会の学習）
奈良市立六条幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・「菜の花プロジェクト」（菜の花の栽培・収穫・活用を通した循環型社会の学習）
奈良教育大学附属幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・鹿を守るためのゴミを拾い活動
あやの台幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・栽培活動、調理体験 ・地域の清掃活動
広島大学附属幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・『持続可能な社会づくりの構成概念（幼児版）』の作成 ・森の環境をいかした遊び

4. 信州大学教育学部附属幼稚園における ESD 実践

4.1 信州大学教育学部附属幼稚園の概要

本稿で事例として取り上げるのは信州大学教育学部附属幼稚園（以下、附属幼稚園）である。附属幼稚園は、令和2年度は、3歳児が27名、4歳児29名、5歳児31人名が在籍し、年少2クラス、年中1クラス、年長1クラスの計4クラスで構成されており、自由保育を主軸としながら「夢中になって遊び続ける子ども」を理想とする教育方針に掲げている園である⁸。ユネスコスクールへは2018年に加盟している。2019年度のユネスコスクール年次報告書によると、「自然環境を大切にすることを育む」を活動テーマとし、資源の再利用を通じた環境保全を主体的に進めようとする力の育成を目標として設定し、資源回収・分別・再利用を柱に、①資源回収に係わる活動、②再生資源を使った遊びに係わる教育、③資源に係わる学習、④環境に係わる学習を行っている。本稿では、これらの附属幼稚園における ESD 実践の中から主に②を取り上げて検討する。

4.2 資源回収に係わる活動の様子

附属幼稚園の入口には、家庭で出た牛乳パックやトイレトペーパーの芯、お菓子やティッシュの空き箱等を回収するために、資源回収箱が設置されており（図1）、朝や帰りの登下園の際に、子どもを送迎する保護者が家庭から持ってきた資源を箱に入れている（図2）。資源は種類ごとに細かく分別して回収されるようになっており、表5に示した17種類に分かれている。トイレトペーパーの芯に関しては茶と白の色ごとに、また、カレーの空き箱はレトルトとルーに分けるなど、所謂リサイクルのための分別ではなく、資源を素材として保育で再利用することを前提とした分別がなされている。また、資源回収箱は、中身が見える透明な箱に、ひらがなでも分かりやすく明記し写真を貼る等して、保護者だけでなく子どもたち自身も分別できるように工夫されている（図3）。

回収資源（以下資源）は、洗浄・消毒された後に教材室に保管し、保育内容に応じて素材として教室に並べて、子どもたちが遊びの中で活用することになる。教材室には、17種類に分けて資源がさらに細かく分類され整理されている（図4）。例えば、カップについては、ヨーグルトカップ（大）、重ねられるヨーグルトカップ（小）、重ねられないヨーグルトカップ、重ねられないデザートカップの大きく4種類に分けられている。では、これらの資源を

表5 回収資源の分別種類

ヤクルト容器	R-1 容器	ペットボトルキャップ
ヨーグルトカップ	キッチンペーパー芯	ラップ芯
トイレトペーパー芯（白）	トイレトペーパー芯（茶）	透明カップ
ティッシュ箱	牛乳パック	円筒箱
カレー箱（ルー）	カレー箱（レトルト）	アイス箱
箱（小）	紙袋	

ユネスコスクール認定幼稚園におけるESD実践

使って子どもたちはいかに遊んでいくのだろうか。次に実際に資源を使って遊んでいる子どもの姿から、領域「環境」に関連する要素について捉えていく。



図1 並べられた資源回収箱



図2 資源回収箱に資源を入れる保護者



図3 漢字とひらがなで表記された資源回収箱



図4 種類ごとに仕分けされた棚

4.2 回収資源を使った遊びの様子

(1) 素材コーナーと作品

自由保育を主軸としている附属幼稚園では、教師が用意した環境構成の中で、子どもたちは個々に自由な発想のもとで遊びに没頭していく。空き箱等の資源は、ハサミや布テープ等と共に素材コーナーに用意されており（図 5）、その時の興味に応じて、子どもたちは資源を組み合わせて作りたいものを形にしていく（図 6）。



図 5 素材が置かれたコーナー



図 6 資源で作った作品

(2) 回収資源を使った遊びの様相

では、ESD として実践されている資源を活用した遊びにおいて、領域「環境」としての探究の要素はいかに位置づいているのだろうか。まず、年少 A 児の資源を活用した遊びの様相について述べ、次節で、領域「環境」としての位置付けについて考察する。

本事例は年少 A 児が資源を使って恐竜を制作する過程を捉えたものである。筆者は A 児を抽出児に位置付け遊びの時間の開始から終了まで約 50 分間の観察をおこなった。観察中はデジタルカメラで写真と動画で記録を取り、適宜、観察記録をつけた。なお、担任教師によると A 児は生き物への関心が高く、恐竜に関する知識が豊富であるということだった。

表 6 は、A 児の資源を使いながら恐竜を作り上げる一連の遊びの様子を 5 段階に分けたものである。A 児は遊びの時間が始まると、素材コーナーへ行き空き箱 5 つとペットボトルキャップ 1 つを使いながら恐竜を作り始めた。1 の場面で空き箱を選択する際、用意された様々な形の空き箱の中から、適したサイズの箱を比較しながら選ぶ様子がみられた。

表 6 資源を使った A 児の遊びの過程

NO.	A 児の行動	A 児の様子
1	<p>ココアと歯磨き粉の空き箱を布テープで接着させ恐竜の首と頭を作る。その後、胴体を作るために素材コーナーへ行った。カレールーの空き箱と、細長い菓の空き箱を取り上げたものの、一度動きを止め、菓の空き箱は元に戻して大きめのお菓子の空き箱を選び直した。</p>	
2	<p>カレールーの箱とお菓子の箱を布テープで巻きつけ、更に先ほど戻した菓の空き箱を前方に追加して胴体部分を作った。その後、最初に制作した首と頭の部分を取り付けることを試みた。</p>	
3	<p>頭が重く思うように首を立たせることができない。片手で首を持ち上げるとテープを貼ることができなくなる。その後、ブロックの段差を利用し、段差に頭を置けば首を立たせて両手でテープが貼れること発見した。</p>	
4	<p>恐竜の尻尾をつけたいと考え素材コーナーで青色のペットボトルキャップを選びセロハンテープで貼り付けた。その後、先生に完成した恐竜を見せに行き、尻尾をつけたことや恐竜の生態の特徴について説明をした。</p>	
5	<p>B 児と作品を見せ合う。ペットボトルキャップが使われていることに気が付いた B 児が「僕はここに付けてる」「これ (A 児の作品) セロテープ使ってる」と指をさすと、A 児は、「これは尻尾だよ」「ここまでは布テープだよ」と作った工程を説明した。</p>	

特に胴体に関しては、カレールーの箱を選んだ後に、細長い箱を選び、その後、その箱を戻して大きいお菓子の箱を選び直すなど、箱の大きさと作りたいもののイメージを重ね合わせながら、箱を選択していた。また、2と3の場面では、布テープを使用して箱を接着させることに試行錯誤をしている様子がみられた。恐竜の首から上の部分が胴体に対して垂直に立たせるために、片手で首から上の部分を持ちバランスを取りながら布テープを貼り付けようとするものの、片手のみで布テープを扱うことは難しく、また、箱同士を接着できたものの恐竜の頭の重さで首が倒れてしまい思うように立たせることができない。その後、作業台にしていたブロックの段差に気が付き、段差を使って首から上の部分を持定させることを思いついた。布テープを貼る側が手前に来るように段差に置き、両手を使って布テープで首と胴体を固定させ、首から上を立たせることができた。

また4の場面では、恐竜の尻尾としてペットボトルキャップを使用している。白やオレンジなど様々な色のキャップがある中で青色を選びとり、また、それまで使用していた布テープは使用せず、青色が見える透明のセロハンテープを使って尻尾を取り付けている。形だけではなく資源の色にもこだわりを持っていることが分かる。5の場面では、同じように資源を使って武器を作っていたB児がA児の作品に興味を示し、互いの作品を比べながら使用している材料の共通点や異なる点について伝え合う様子がみられた。特にB児は布テープを使用してペットボトルキャップを取り付けたためキャップの色が見えなかったが、A児は透明のセロハンテープを使ったことにより青色が見える状態にあり、その気づきを指さしながら伝え合っていた。

5. おわりに—ESD実践における領域「環境」の位置付け—

5.1 考察

本研究は、具体的な子どもの遊び姿を捉えることを通して、ESDにおける領域「環境」の位置付けについて探究を切り口としながら考察することを目的としていた。前節で述べた資源を使った遊びからは、空き箱の選択や布テープの貼り付けに試行錯誤しながら、イメージした作品を探究的に作り上げていく姿を捉えることができた⁹。なお、回収資源を使用した玩具については西本（2012）が「循環社会をめざす現代社会にあって、玩具の意義には、使用した玩具を廃棄するときリサイクルすることと、使用した廃品・廃物を玩具として使用することとの二つに大きく分けることができる」ことを指摘しており、この点においても資源を活用した遊びは、ESDにつながる事が明確である。しかし、本研究で考察したいのは、資源を活用した遊びがリサイクルやリユースの気持ちや行動を育むだけでなく、探究心を育み、ESDと親和性の高い領域「環境」の内容として位置づくということである。そこで、資源を活用した遊びが探究を促す要素について考察する。まず1点目は、資源の形態的な特徴である。空き箱は様々な形をしており積み木のように同じ形状のものが複数揃ってはいない。作りたいものを作り上げるには、限られた種類の中で大きさや色など組み合わせを考えながら創造することになる。そして2点目は、資源が操作可能

な立体物であるという点である。厚紙で作られた立体的な箱やペットボトルキャップやヤクルトの容器などプラスチックでできた筒状の形状は、何もない状態からは作り出すことが困難な魅力的な立体物でもありながら、形を組み合わせたり貼り付けたりするなど、自分の力で操作可能であり創造的に扱うことができるものである。このような自分の創造性を発揮できる範囲が広がったことにより探究を促したと示唆できる。

5.2 今後の課題

本稿では附属幼稚園の回収資源を活用した遊びの様相から領域「環境」の位置付けについて捉えてきたが、回収資源を活用したことのみが探究的な遊びを促したのではなく、教室内の環境構成や共感的でほどよい距離感で支援する教師の影響についても検討する必要がある。また、ESDとして取り組まれやすい環境分野の実践であるが、その内容は多岐に渡っている。栽培活動や清掃活動、自然体験活動など、多様な内容に応じて子どもの探究の姿を捉えることで、その素材が持つ教材としての価値がより鮮明になるであろう。また、幼稚園で行われるESD実践は保育内容としての「遊び」が中心となるが、幼児教育段階からの教育の質の向上が求められ、資質能力の明示化が進められる中で、意識的な学びではなく発達の過程で無意識的に習得される遊びを通した学びについて、いかに評価し得るのかについて考えることが重要である。これらの課題については別稿に期すこととする。

参考文献

- ・加藤望 (2016) 「日本に乳幼児教育・保育における持続可能な開発のための教育 (ESD) の現状と課題」 愛知淑徳大学『愛知淑徳大学論集—福祉貢献学部篇』第6号, pp.89-96。
- ・後藤由美 (2019) 「「領域」環境から考えるESD・SDGs教材の在り方についての一考察」 『瀬木学園紀要』15号, pp.54-58。
- ・谷口一也 (2020) 「SDGs時代の幼稚園教育領域「環境」のあり方」 関西国際大学教育総合研究所『教育総合研究叢書』13号, pp.137-146。
- ・西本望 (2012) 「おもちゃ (玩具) の循環社会での意義 - こどもの発達と玩具での遊び - 」 『廃棄物資源循環学会誌』Vol.23, No.3, pp.180-189。
- ・藤永豪 (2020) 「幼稚園教育における領域「環境」とESDおよびSDGsとの関連について」 西南学院大学『人間科学論集』第15巻, 第2号, pp.359-372。
- ・文部科学省 (2018a) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』株式会社東洋館出版社, 『中学校学習指導要領 (平成29年告示)』『高等学校学習指導要領 (平成30年告示)』株式会社東山書房。
- ・文部科学省 (2018b) 『幼稚園教育要領 (平成29年告示)』株式会社東山書房。

¹ 文部科学省「第3期教育振興基本計画」

https://www.mext.go.jp/content/1406127_002.pdf, p.52 (2020年12月1日閲覧)。

² 佐久間重嘉 (2020) 『教育小六法<2020年版>』学陽書房。

-
- ³ 日本ユネスコ国内委員会『『持続可能な開発のための教育：SDGs 達成に向けて（ESD for 2030）』について』https://www.mext.go.jp/unesco/001/2019/1421939_00001.htm（2020年12月1日閲覧）。
- ⁴ 日本ユネスコ国内委員会「ユネスコ活動の活性化について（建議）」<https://www.mext.go.jp/unesco/002/1422209.htm>（2020年12月1日閲覧）。
- ⁵ 伊井直比呂（2016）「グローバル時代の「学力」を考える：ユネスコ協同学校ネットワークによる学校連帯から」日本学校教育学会『学校教育研究』第21巻，p.93-108。
- ⁶ 日本ユネスコ国内委員会教育小委員会持続発展教育（ESD）の普及促進のためのユネスコ・スクール活用に関する検討会（2008）「持続発展教育（ESD）の普及促進のためのユネスコ・スクール活用について提言」，p.3。
- ⁷ ユネスコスクールの年次報告書は、ユネスコスクール事務局が運営する公式ホームページ（<https://www.unesco-school.mext.go.jp>）に掲載し公開されることで提出が認められるものであり、ホームページ上の「加盟校情報」から内容を確認することができる（2021年3月15日現在）。年次報告書の内容項目は、「学校基本情報」と「活動内容」の2項目であり、「活動内容」については、①学習の題材として取り上げている分野（複数選択可）、②活動の概要（800字程度）、③活動計画（200～400字程度）の3点を記入することになっている。
- ⁸ 信州大学教育学部附属幼稚園「本園の教育」<https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/education/matsu-you/>（2021年1月31日閲覧）。
- ⁹ 幼稚園教育要領に示された領域「環境」の11個の内容項目に当てはめると、「(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ」「(7) 身近な物を大切にする」「(8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ」「(9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ」に関連付けることもできる。

付 記

本研究は信州大学教育学部附属幼稚園から実践記録を提供いただき分析を行っている。快く協力いただいた幼稚園関係者にこの場を借りて感謝の意を表したい。

(2020年11月30日 受付)
(2021年 3月22日 受理)